水邊ニ多ク生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、初メ出ル時筍ノ如シ、唐山ノ人ハ採リ食フ、コレヲ蘆筍ト云、然レドモ南土ノ者ハ堅クシテ食フベカラズ、北土ノ者ハ柔ニシテ食フベシ、今清商食用ニ持來ル者、長サ三寸許二ツニ剖テ蒸シ乾シタルモノ也、是ヲ水ニ浸シ煮食フ、苗長ズレバ高サ丈餘枝ナシ、葉ハ竹葉ニ似テ長大互生ス、秋ニ至テ莖梢ニ穗ヲ出ス、菅ノ穗ノ如クニシテ枝多シ、長サ一尺餘、秋ノ末莖葉共ニ枯ル、一種莖幹至テ粗大ナル者ヲ鵜殿ノヨシト云、攝州島上郡鵜殿邑ノ名產ナリ、莖ヲ用テ篳篥ノ義嘴ニ作ル、コノヨシハ證類本草蘇頌ノ說ニ、深碧色ナル者、謂之碧蘆ト云者ナリ、集解ニコノ說ヲ引ケドモ、謂之碧蘆ノ四字ヲ脫セリ、宜シク補フベシ、〇略中

蒹　ヒメヨシ　一名ヨシモドキ、スダレヨシ、カナヨシ、仙臺ヒヨヒヨ、濃州蘆ノ一種形小ナル者ナリ、

〔尺素往來〕爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、〇略中　雜草木者、〇略中　蒹葭、木賊、姫葦、

〔攝津名所圖會四下大坂〕片葉蘆　按ずるに、都て難波は川々多し、淀川其中の首たり、其岸に蘆生繁りて、兩葉に出たるも、水の流れ早きにより、隨ふてみな片葉の如く、晝夜たへず動く、終に其性を繼て、跡より生出るもの、片葉の蘆多し、故に水邊ならざる所にもあり、難波に際ず、八幡、淀、伏見、宇治等にも、片葉の蘆多し、或云、難波は常に西風烈しきにより、蘆の葉東へ吹靡きて、片葉なる物多しといふは僻案なり、

〔續江戸砂子五〕雜樹

增、片葉の蘆、淺草慶印寺の前片葉の蘆　あさぢがはら　かゝみの池　片葉の蘆　淺草馬道ひし屋長や

〔紀伊國名所圖會二海部郡〕片葉の蘆　和歌津や村の北の入くちにあり、是また蘆邊の遺跡也、すべて川邊のあしは流につれて、自然と片葉となるものあり、又其性を受て芽いづるより、片葉蘆と